

氏名(本籍地)	萩原 孝恵 (群馬県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第63号		
学位授与年月日	平成21年9月30日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第2項該当		
論文題目	「だから」の語用論 ーテキスト構成的機能から対人関係的機能へー		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	徳永 美暁
	(副査)	昭和女子大学特任教授	池上 嘉彦
		昭和女子大学特任教授	中田 清一
		青山学院大学大学院国際政治経済学研究科	
		教授	田辺 正美

論文要旨

本論文は、接続詞「だから」は前件と後件の関係が順接であるという論理的な意味機能を有するだけでなく、特に話し言葉での「だから」の使用は話者の無意識の知識を如実に表出したものであるという「だから」の語用論的な複雑で多様な機能を分析し体系化したものである。執筆者の研究目的は、母語話者が頭の中に持っている日常の話しことばにおける「だから」の運用ルールの解明、すなわち無意識の知識の解明である。

本論文の執筆者は、長年大学で日本語の教師として日本語学習者と関わってきたが、「だから」などの接続詞を教える場合に、基本的な意味として、例えば、「今日は晴れていた、だから洗濯物がよく乾いた」のような前件と後件の論理関係が「順接」であるということのみを教えても、日本語母語話者の発話では「順接」と言う説明だけでは解決しない用法が多く現われ混乱を招くことに疑問を抱いてきた。実際の母語話者の会話で使用される「だから」は、例えば、(母親が夜更かしをして朝起きられない息子に)「だから、遅刻するのよ!」のような前件がなく「だから」に続く後件との因果関係が示されない使用が多く観察される。このような語用上の「だから」の運用ルールを教えることができなければ、学習者は日本語母語話者の「だから」を前件と後件の論理関係が順接であると捉え、母語話者の多様な「だから」の使用の意味が分からないだけでなく、その発話の意味を誤解することもある。そこで、本論文には、適格な「だから」の使用ができるように教えるためには、「だから」を日本語母語話者がどのような機能を有する語として使用しているのかを解明しなければならないという執筆者の研究動機が根底にある。

本論文では、上記の現状と目的に基づいて、「だから」の会話における機能は、まず「テキスト構

成的機能(textual function)」とその拡張用法としての「対人関係的機能(interpersonal function)」の二つの概念を併せ持っているということを明らかにする。その上で、これらの概念を併せ持つが故に、＜照応＞先となるはずの前件が言語上表われない場合にも、会話者間の役割関係が power(タテ・ヨコの関係)と solidarity(ウチ・ソトの関係)によって照応先を推測するということを詳細、且つ論理的に検証する。つまり、「だから」の＜照応＞の仕方は、会話者間の役割に影響を受けており、ウチの関係の会話においては、「だから」の使用は＜主観化＞され「わたしの論理」が働くというものである。

よって、「だから」による発言の解釈は、何が前景化され聞き手に伝達されるのかによって多様であることから、「だから」の構成機能として、①論理関係「順接」、②発話行為の目的「説明」、③機能: (i)「テキスト構成的(文脈照応・外界照応)」、(ii)「対人関係的(相手の＜認識＞にアピール・相手の＜心＞にアピール)」、(iii)「発話コントロール(ターンの取得・保持・譲渡)」があると考察している。

本論文は5章より構成されている。第1章では、研究の目的と考察の方法を示し、人間関係がいかに接続詞の使用と関わっているかを「だから」の例を通して明らかにし、また、母語話者が自然に身につけている接続詞に関する無意識の知識の解明も本研究の目的であることを示す。第2章では従来の研究で議論されてきた「だから」の性質・機能を整理し直し、先行研究を詳細に検討し、従来の見方では「だから」の重層的で多様な機能層が明確にならないことを明らかにする。第3章では母語話者の接続詞の使用実態を探るために、会話者間の関係別に接続詞の使用調査を量的観点から行い、「だから」の使用に、「power and solidarity」、つまり「タテとヨコ」と「ウチとソト」の関係との関連が見出されることを実証する。第4章では「だから」の＜分布＞＜照応＞＜主観化＞という観点から「だから」の語用論的機能を明確にする。第5章は、本論文のまとめと今後の課題、そして日本語教育への実践的応用についての必要性について述べる。